創世ホール通信 No.270

催し案内＋文化ジャーナル
2017年7月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎

人形劇団べんべろべえ けんとくんのつり

7月6日（木） 11時～

会場●2階ハイビジョン・シアター

内容●「けんとくんのつり」

対象●未就学児もOKです。2歳ぐらいから楽しめます。

主催●人形劇団べんべろべえ（兵頭☎088・698・6652）

■北島町内の主婦が作ったアマチュア人形劇団べんべろべえの公演です。事前申し込み不要です。多数ご参集下さい。

徳島クリエーターズマーケット23

7月22日（土）－23日（日） 10時～17時

会場●2階ギャラリー　＊最終日は16時迄

主催●徳島クリエーターズマーケット事務局（川久保☎080・4034・1090）

■凄腕の「モノ作り人」達が集うマーケットの記念すべき20回目の催しです。本町在住のハンドメイド作家・川久保貴美子さんが呼びかけて実現。川久保さんは、新聞・テレビ・ラジオ等で話題沸騰の脱力系癒しキャラ《ししゃもネコ》を造形した作家です。ご注目を。

徳島ワークショップフェスVOL.2

8月5日（土）－6日（日） 10時～17時

会場●2階ギャラリー　＊最終日は16時迄

主催●ちくちくくるり（☎088・697・0767）

夏休み子どもビデオ上映会 音楽劇★生命誌版 セロ弾きのゴーシュ

7月28日（金） 2回上映

①11時～　②14時～

会場●2階ハイビジョン・シアター　無料

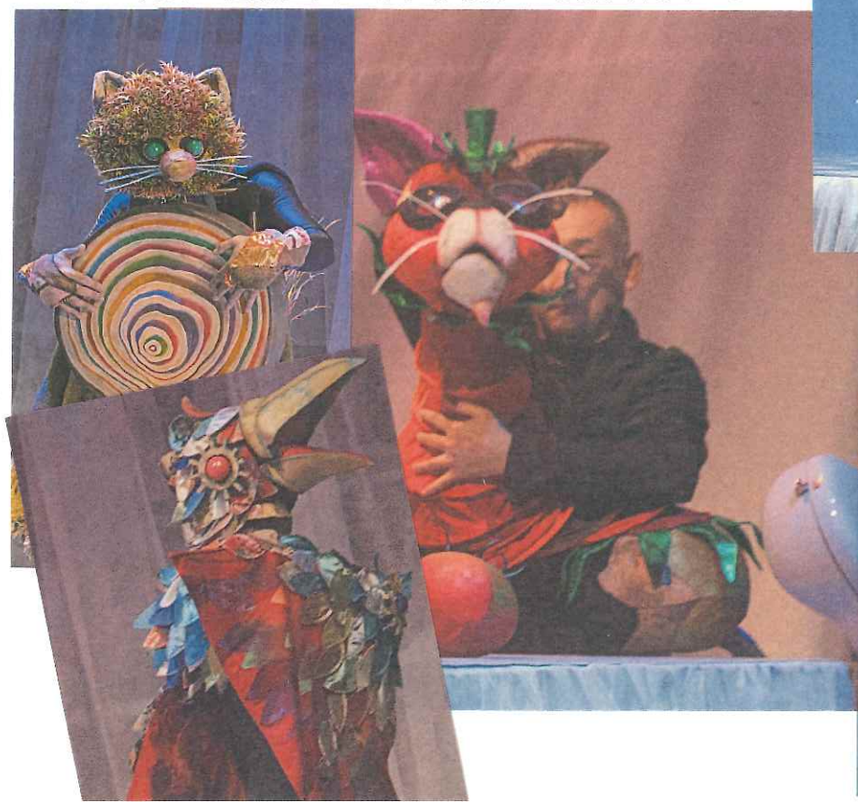
作品●「音楽劇★生命誌版 セロ弾きのゴーシュ」

（2014年、ＪＴ生命誌研究館、49分）

原作＝宮沢賢治　演出＋人形遣い＝沢則之　チェロ＝谷口賢記　ピアノ＝鎌倉亮太　語り＝中村桂子・村田英克

主催●北島町立図書館・創世ホール

■2014年、大阪高槻市のＪＴ生命誌研究館の呼びかけで、宮沢賢治の名作が、幻想的なフィギュア・アート・シアターとして各地で上演され、大変な好評を呼びました。その舞台を完全収録したドキュメンタリー映画を上映します■物語は、活動写真館の楽団でセロを弾くゴーシュが、水車小屋で動物たちと触れ合ううちに、演奏家として人間として成長してゆく姿を、ユーモラスに描きます。小学生から大人まで楽しめる作品です■この催しは、昨年9月のドキュメンタリー映画「水と風と生きものと」上映会の連動企画です。多数、ご参集ください。



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

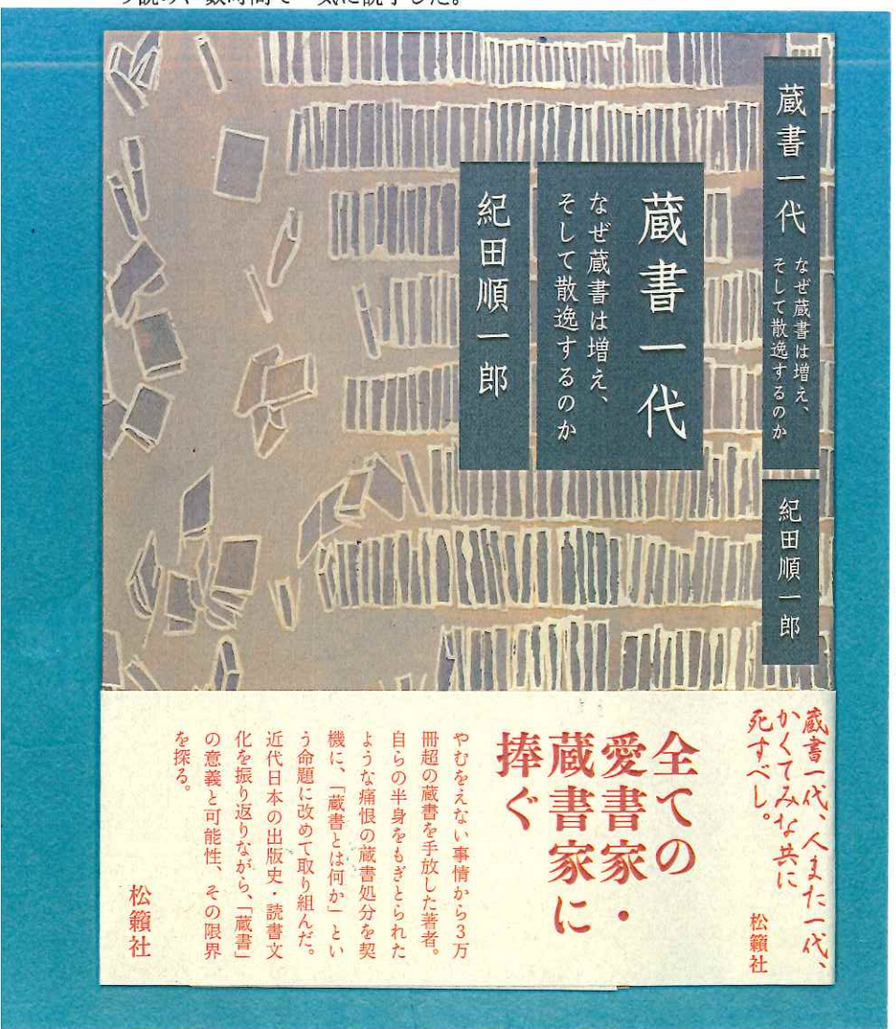
良書紹介●紹田順一郎『蔵書一代』松籟社

全読書人は本書を購入し紹田先生に最敬礼を！●小西昌幸

■私は最近、読書をしながら脳内に音楽が流れるような体験をすることがある。それは、たまたまここ半年ほど、**徳島市**内のコミュニティＦＭ局の番組で70年代英国ロック音楽名曲選のようなものの放送にタッチすることが時々あるので、もしかしたらその経験からきているのではないかと思う。

■この**紹田順一郎**先生の本『**蔵書一代　なぜ蔵書は増え、そして散逸するのか**』（**松籟社**、2017年７月14日、本体1800円）を読みながら、私は無意識に、脳内に**レッド・ツェッペリン**屈指の名曲「**アキレス最後の戦い**（原題はアキレス・ラスト・スタンド）」の威風堂々・厳（おごそ）かで勇壮で煌（きら）びやかなイントロを鳴り響かせ続けていた。そして私は心の中で、握りしめた拳（こぶし）を高々と振り上げていた。**紹田**先生への感謝の言葉を唱えながら。この種の文章を、61歳にもなった人間が書くのは少々気恥ずかしい気もするが、事実だから仕方がない。文句あるかい？

■**紹田順一郎**先生から「恐らく自分の最後の書物となるであろう『**蔵書論**』（仮題）の執筆に取り組んでいる」旨のご連絡をいただいたのはいつだったろうか（年賀状の添え書きや電子書簡のやり取りの際だったと思う）。その書き下ろし単行本こそ、本書『**蔵書一代**』なのである。私は夢中でむさぼり読み、数時間で一気に読了した。



■**紹田**先生の古書ミステリの熱心な読者ならお分かりの通り、『**古本屋探偵の事件簿**』（**創元推理文庫**）で活躍する古書探偵・**須藤康平**の**神田神保町**の店名が《書肆・蔵書一代》なのである。『**古本屋探偵の事件簿**』巻末の解説対談（**紹田順一郎**×**瀬戸川猛資**）で、**瀬戸川**氏は「どんな蔵書家でも、亡くなると、奥さんの手で蔵書は処分されてしまう。まさしく『蔵書一代』。」と語り、それを受けて**紹田**先生は「そう。それが結局、本書のテーマになってるということでしょうね。」と述べている。

■**紹田**先生が、「これが恐らく自分の最後の本」と語り、その書名が『**蔵書一代**』なのである。このことが、極めて深刻に、痛切の響きを持って私の胸に突き刺さったとしても何ら不思議ではない。

■**紹田**先生は、夫人が足を悪くされたため、シニア向けのマンションへの引っ越しを真剣に検討することになる。そしてその際、スライド式書架２台分の６百冊を除いて約３万冊の蔵書をすべて古書店に引き取ってもらう決断を下すのである。「序章〈永訣の朝〉」は、全ての本好きには胸かきむしられる内容である。**紹田**先生は、明治大正期の長い歳月と人生を賭け事典作りに取り組んだ人々の業績を紹介し、深い感銘を読書人に与えてこられた人だが、その**紹田**先生が**広文庫**や**古事類苑**や**大日本地名辞書**などをおさめた棚にテープで×印（処分決定）をつけてゆくくだりが書かれている。また、先生が最後の荷物を載せたトラックを見送り、その場に倒れてしまう場面もある。それらの描写は、読んでいてこちらの胸も苦しくなるほどだった。巻末年譜によるとこの処分断行は2015年12月のことだったようだ。

■せっかくなので、**紹田**先生ご自身がＨＰ「**紹田順一郎　書斎の四季**」でお書きになった2017年７月７日付の日記を謹んで転載させていただこうと思う。先生ご自身の思いがストレートに書かれていると思うからだ。

新著『蔵書一代』について　　紹田順一郎

新著が出た。一昨年、蔵書のほとんどすべてを、万やむなく処分したことで、体調に著しい変化をきたし、これを機に蔵書とは何かということを考えるようになった。単なる所蔵本の堆積でもなく、かといってミニ図書館というほどの充実性も、開放性もないが、私にとってかけがいのない、人生に相渉るものには相違ない。

近年、蔵書処分をめぐって悩む人が多いとやら、一つの世代的な現象なのかもしれない。実際、蔵書処分は大変なことで、人生の終末期に、こんな段階があるとは思ってもみなかった。

そんなことを逐一、他の見聞をもまじえながら、ときには文化史的に視野を広げて、その中に自らを位置づけ、さらに蔵書の可能性と限界について考えてみたのが本書である。

執筆中、眼前に去来したのは、書物以外に生きがいのなかった一生ということだった。蔵書一代、人また一代、かくてみな共に死すべし。師友夙に去り、同期の友もほとんどが幽冥境を異にし、われもまた一期の影傾いて、明日なき身をガラン洞の書庫の前に、mortal coil（生ける屍）として横たえるのみ…。

何度も中絶しようと思いつつ、死灰の日々から気力を振り絞るようにしてものした著作である。少しでも共感する方があればうれしい。版元は、私の著書を近年手がけていただいている松籟社である。

■本書には蔵書が守られ研究対象となった貴重な事例として**江戸川乱歩**の旧蔵書＆書庫（土蔵）が多くの頁数を費やして取り上げられている。また昭和の蔵書家の項では、**草森紳一**、**山口昌男**、**山下武**、**島崎博**、**竹内博**等が登場する。このあたりの目配りこそ、**紹田順一郎**先生の独壇場なのだ。

■私は**紹田**先生に、新作の古書ミステリを書いて欲しいと願う。構想はお持ちのはずだ。ぜひまだまだご活躍いただきたいのだ。そのためにも本書は幅広く読まれなくてはならない。（2017年07月09日脱稿／文責＝**小西昌幸**）

「北島音頭」をめぐって【その３】●小西昌幸

北島音頭カラオケ映像に関する謎について

■本誌前号（269号、2017年６月号）および前々号（268号、５月号）で、「北島音頭」に関することについてはおおむねメモ出来たと思う。ただ、カラオケ映像のことが漏れていたので、そのことを書いておきたい。

■夷谷清三郎氏（元北島町文化協会会長）が亡くなったとき、「北島音頭」に関するＤＶＤ２種類が、親しい関係者に配布されたと聞いている。一つは前号でも少し紹介したキューテレビの番組（2011年11月24日放送の「キュートモ」）を収めたもの、もう一つは夷谷さんの歌を収めたものである。

■そのＤＶＤは夷谷さんのご近所の祖地兼成（そち・かねしげ）氏が製作されたものだった。このたび、ＤＶＤの件について祖地さんにお聞きしてみた。祖地さんは北島町立図書館の点字絵本ボランティア・グループのメンバーであり、パソコン操作にも堪能で、大変器用な方である。私（小西）とは大変親しい間柄なのだ。祖地さんから次のような証言を得た（以下箇条書き）。

一．2011年11月20日開催の「平成23年度文化協会芸能大会」で町文化協会有志による「北島音頭」の復活披露（歌＋踊り）にあたり、夷谷清三郎さんからカラオケ映像を作るよう依頼を受け、ＤＶＤを製作したことがある。

一．芸能大会ではＤＶＤのカラオケ映像をステージ前にセットし、それを見ながら歌手が歌うため、夷谷さんの知人の祖地さんが依頼を受けた。

一．歌詞は、テープを聞き取ってメモし、画像に貼り付けた。

一．映像は、歌詞を元に自分で撮影した町内の風景などを組み合わせた。

一．カラオケのカセット・テープは夷谷さんが持参した。

一．没後に配布したＤＶＤの夷谷さんの歌声は、夷谷さんが自宅の機材で録音したカセット・テープに基づいている。夷谷邸には、立派なカラオケ装置一式があった。

■この証言は大変重要で、多くの謎が判明したのだった。また、改めてカラオケ映像の音を点検してみると、伴奏とともに女性の声で、合いの手が収められていることが確認できる。この伴奏と声の主はやはり作者赤野壽さんのご近所にお住まいだった石川美智子さんで間違いないのではないか（前号掲載の赤野壽さん執筆随想「私とギター」参照）。

■以上で「北島音頭」とその周辺事情についてはだいたい明らかにできたのではないかと思う。ご協力いただいた関係各位に深く感謝するものである。（2017年07月11日脱稿／文責＝**小西昌幸**）

コラム★とてもいびつな本県文化行政に関するメモ■私は羊のようにおとなしい、極めて従順な性質の還暦過ぎの小市民（町民）であるが、このたびの「とくしま記念オーケストラに関する１コーディネーターの巨額所得隠しと脱税事件」には疑問がわき不愉快な気持ちになった■徳島県は封筒に「ＶＳ東京」などと刷り込んでいるが、恥ずかしくないのだろうか。また、こんなことでよくもまあ「文化立県」などとふんぞり返っていられるものだ■だって「とくしま」とわざわざ銘打ちながら記念オーケストラのメンバーには徳島県の人は一人もいないというではないか（笑）■明らかに文化行政がゆがめられ、反社会的人格の持ち主に本県県民の血税数億円が食い物にされたのである（それも首都圏の人間に）■最大の疑問は、どうしてそんな反社会的資質の品性下劣女性コーディネーターにずっと業務をお任せしてきたのかということなのだが、どうも聞くところでは、さる偉い人の古い知人であるという。あちゃー。ここにもお友達問題が■次の問題は、そのお金（血税）の行方だ。徹底調査しなくては県民は納得しないだろう。まさかいくらなんでも、こんな想像はしたくないのだが、誰かさんの懐（ふところ）に、そのお金が還流されるようなことがあったとしたら大変なことになるだろう。であるからこそ、県庁の偉い方々は、やましいことがないのなら、ここはやはり徹底調査するべきでありましょうなあ■今回のことで文化立県会議では「委縮することなく事業を進めよう」と言った人がいたらしいが、少なくとも徹底した自己批判と自己反省はするべきであろう■この際、オーケストラの人たちにアンケートを取ってはどうだろうか。文化に関わる者としてこの種のことは、本当に恥ずかしいことなのだから（2017年07月11日脱稿/文責＝**小西昌幸**）